

記憶の暗がり

—ミンコフスキーにおけるベルクソン—

佐藤 愛

ウージェーヌ・ミンコフスキーは、自身の著作において繰り返しベルクソンについて言及しており、『生きられる時間』（1933）では、統合失調症の精神病理学に向けられた自身の最初の研究が、「ベルクソンから着想を得たものである」¹ことを明言している。ミンコフスキーは、ベルクソンにおいては「知性と直観」、「死せるものと生けるもの」、「不動と流動」、「存在と生成」、「空間と生きられる時間」といった「二つの原理」が対立しつつも、「調和した一つの全体」を成しているとし、さらに、統合失調症とは二つの原理のうちの後者、すなわち「直観」や「流動」、「生きられる時間」が侵されたものであるとした。このように、ベルクソンがミンコフスキーにおいて多大な影響を与えたことは明らかである。しかし、両者における思想展開の具体的内容については、これまで、上述したベルクソンの代表的概念の反復以上には明確に論じられてこなかった。したがって本稿では、ミンコフスキーの主要概念である「現実との生命的接触 (*contact vital avec la réalité*)」の分析から出発し、これと「共通点をもつ」²とされるベルクソンの「生活への注意 (*attention à la vie*)」とを突き合わせることによって、この問いについて論じる。これによって、ミンコフスキーの『生きられる時間』が、ベルクソンにおける現在から逃れ去る過去についての問題を精神病理学の領域において展開させることによって、その否定的側面を経由した上で、それが積極的側面へ至る道筋を示すことを目論見の一つとして含んでいた著作であることが明らかにする。

順序としては、まずミンコフスキーの博士論文「現実との生命的接触の喪失概念とその精神病理学における適用」(1926) 及び『精神分裂病』(1927) において、「現実との生命的接触」概念成立の精神医学的背景を確認し、続いて、『生きられる時間』においてこの概念をミンコフスキーが述べる「日常の現象」のなかから検討する。次に、「現実との生命的接触」と「共通点をもつ」とされるベルクソンの「生活への注意」が由来する暗がりについて確認し、最後に再び『生きられる時間』を分析しながら、ミンコフスキーが述べる「記憶」の暗がりについて検討する。

1. ミンコフスキーにおける「現実との生命的接触」

ミンコフスキーの「現実との生命的接触」概念は、この「喪失」から統合失調症を論じようとするものであり、統合失調症の「基本障害 (trouble générateur)」とされるものである。また、ミンコフスキーは 1926 年に提出した博士論文「現実との生命的接触の喪失概念とその精神病理学における適用」において、「現実との生命的接触の喪失概念は、プロイラーの自閉 (autisme) 概念に由来するが、一方では、ベルクソニズムの理念から着想を得ている」³と述べ、その「現実との生命的接触」概念が、プロイラーの「自閉」とベルクソニズムの影響を受けて形成されたものであることを明らかにしている。では、「現実との生命的接触」とはどのようなものなのだろうか。

まず、ミンコフスキーがプロイラーの「自閉」概念⁴を「統合失調症」における「基本障害」であるとみなした上で、あえて「自閉」ではなく「現実との生命的接触の喪失」という新たな語を提示しようとした点に注目したい。プロイラー自身も指摘しているように、「自閉」には、統合失調症の症状としてのそれ以外に、子供の遊びやお伽話、伝承、夢や夢想などといった、周囲の環境に対して「顧慮を払わず、感情のおもむくところに従う、正常な自閉的思考」⁵も含まれる。ミンコフスキーは、プロイラーが「自閉」を統合失調症の主要な症状として初めて示した点を評価しながらも⁶、「自閉」状態と「正常な自閉的思考」を区別する必要があると考え、「現実との生命的接触」という新たな概念を提示したのである⁷。では、なぜこれが失われると、危機的な状態に陥るのだろうか。

ミンコフスキーは、『生きられる時間』第一部において、「現実との生命的接触」についてこれまでとはまったく違ったアプローチから、すなわちこれが日常生活においてどのように働いているかを分析する。特に『生きられる時間』第一編の第三章は、「現実との生命的接触、生きられる共時性」と題され、この分析に大きく割かれた部分である。ここでミンコフスキーは、「現実との生命的接触」によってわれわれは、周囲の流れと「調和」し、「浸透」し合いながら「前進」していくとし、周囲とわれわれは「生きられる共時性」によって結ばれるとする。そして、この「現実との生命的接触」の「本質的特徴を浮き彫りにする生の日常的現象」こそが、「観想／凝視 (contemplation)」である⁸。ミンコフスキーは、「観想 (contempler)」から「視ること (regarder)」を区別するのは、「観想」の方が「注意の度合いが大きい」ということでは決してなく、われわれが「観想するもの」のなかに完全に吸収され、それによって浸透されるにまかせる (laisser) という一種の受動がある点であるとする。さらに、われわれが「観想」を行うとき、そこには「観想」するものとさ

れるものとの「相互的接触の間断なき交換のようなもの」があるとしている⁹。

さらにミンコフスキーは、「観想」について次のように述べる。

なるほど、われわれに反して、観想は常に外的対象の視覚的知覚に基づいているのではないか、と言うひともいるだろう。しかし、われわれの視野のなかにある対象をその物質性において考えるだけで、観想を完全に霧散させるのに足りるし、同様に、われわれがわれわれの観想するものを現実の一「断片」(« tranche » de la réalité) として表象してみるだけで、この断片の観念が観想とは完全に異質なものであることを、了解するのに足りるのである¹⁰。

このようにミンコフスキーは、「観想」する対象について、これを「現実」の一部の「表象」に還元することも、また、「外的対象の視覚的知覚」に還元してしまうことも拒否する。なぜなら、対象を「観想」することは、「現実」の一部分を表象したり知覚することではなく、「生」の「全体」と接触することであるからである。さらに「観想」する対象とわれわれの関係性について、ミンコフスキーは次のように述べる。

そこには、両者〔観想するものとされるもの〕の、等価性がある。実際、もしわたしが観想するもののうちに吸収されるとしても、観想されるものの方も生気づき (*s'anime*)、わたしと同じく生き生きするようになり、わたしの存在の底にまで浸透し、わたしの靈感 (*inspiration*) の源泉となるのである¹¹。

このように、ミンコフスキーにおいて「観想」するものとされるものとの関係性は、あくまでも「等価」であり、互いに絡み合ったものである。「観想」は、われわれに一方向的に対象の視覚刺激を与えるようなものではなく、われわれと対象とが「共に」生き生きと在ることを可能にする。したがってミンコフスキーにおいては、われわれと対象とがこのように「生気づけ」合う在り方のなかにこそ、「現実」と呼ばれるものがある。しかしこのような「現実」との生き生きとした「接触」は、上述したように、「注意の度合い」の強さに応じて可能になるようなものではなく、あくまで「浸透されるにまかせて」成されなければならないものである。

こうして、『生きられる時間』では、第一部を通して、このような記述に代表されるように、われわれの生における生き生きとした側面が描かれる。そして、第一部最終章における「過去」についての考察を經由して、ミンコフスキーは第二部の

精神病理学的考察に進んでいくことになる。次節では、ミンコフスキーがベルクソンにおいて特に着目する「生活への注意」概念を分析するが、これによって、この「過去」についての章が第一部と第二部の紐帯となっている点とともに、ベルクソニズムがミンコフスキーに受け継がれ、拡大された具体的内容を明らかにする。

2. ベルクソンにおける「生活への注意」

ベルクソンは、『物質と記憶』（1896）の第七版の序において、「生活への注意」について、次のように述べている。

一般に心理生活そのものの錯乱、内的無秩序、人格の病態と見なされているものは、私たちの観点からすれば、この心理生活とこれにともなう運動器とを結ぶ連帯関係の弛緩ないし悪化、外的生活へのわれわれの注意（*attention à la vie extérieure*）の変質ないしは減退と見えてくる¹²。

このようにベルクソンは、精神的な病とは、「外的生活への注意」の「変質」ないし「減退」によるものであると考える。また「外的生活への注意」について、その「度合い」によってわれわれの「心理的生活」が「ときには行動に近づきつつ、ときには行動から遠ざかる」¹³としているため、「生活への注意」の度合いと、われわれの「行動」の現在への適切さとが密接に対応するものであることが分かる。また、ベルクソンは現在の「行動」や「生活」に関して、次のように述べる。

私たちがこうして遡る過去はやはり滑り去って、いつも私たちから逃がれようとする。それはまるで、この後ろ向きの記憶力に他のもっと自然な記憶力が逆らうかのようにであり、この自然な記憶力の前向きの運動が、行動へ、生活への私たちを促すのである¹⁴。

こうして、上の二つの引用から、ベルクソンが「注意」と「自然な記憶力の前向きの運動」とについて、両者とも現在の「生活」において適切な「行動」を取るために必要なものであると見なしていることが分かる。したがって、ミンコフスキーが精神病理学的視点から着目する「外的生活へのわれわれの注意」についてさらに分析するためには、現在の「行動」と「自然な記憶力の前向きの運動」の関係性及びそれに「逆らう」かのような「後ろ向きの記憶力」について確認する必要があるだろう。

ベルクソンは、現在へと向かう「自然な記憶力の前向きな運動」と、過去の想起に浸ろうとする「後ろ向きの記憶力」との均衡について、次のように述べる。

過去をイマージュの形で想起するためには、現在の行動を差し控えることができなければならないし、無用なものに価値を付することを知らねばならず、夢見ることを望まなくてはならない。たぶん人間だけがこの種の努力の能力をもつのである¹⁵。

このようにベルクソンは、「自然な記憶力の前向きな運動」によって可能になる現在の「行動」は、「後ろ向きの記憶力」による過去の想起のためには差し控えられなければならないとする。この事態を逆から言えば、前述した引用にあるように、「自然な記憶力の前向きな運動」が「後ろ向きの記憶力」を抑止するのであり、それによってわれわれは「行動へ、生活へ」¹⁶と促されていく。さらに、この「行動」への「促し」によってわれわれの二つの「再認 (reconnaissance)」が引き起こされるのだが、これについてベルクソンは次のように述べる。

私たちは、自分の再認を考える前に演じている (中略)。機械的な再認を引き起こす運動は、イマージュによる再認を一方では妨げながら他方では容易にしているということもできるだろう¹⁷。

「自然な記憶力の前向きな運動」による「促し」は、現在における「行動」を現実化するに際し、「考える前に演じられる再認」を引き起こす。さらに、この「考えられる前に演じられる再認」、すなわち「機械的な再認」は、もう一つの「再認」、すなわち「イマージュによる再認」を「妨げながらも他方では容易にする」。したがって、「自然な記憶力の前向きな運動」による「促し」は、結果としてまず「運動」とそれによって引き起こされる「考える前に演じられる再認」を可能にし、続いて、「後ろ向きの記憶力」によって成されるはずの「イマージュによる再認」を抑止しながらもこれを準備するのである¹⁸。

このように、「考える前に演じられる再認」、すなわち「非注意的再認 (reconnaissance par distraction)」と、「イマージュによる再認」、すなわち「注意的再認 (reconnaissance attentive)」¹⁹は、ともに現在の身体による「運動」によって引き起こされる。そして現在において身体が「運動」しているということは、われわれが今まさに「行動へ、生活へ」と「注意」を向けている状態であることを示している。したがって、われわれが日々何気なく行っている「外的生活への注意」

は、身体によって自動的に成される「考えられる以前に演じられる再認」よりもさらに以前の、「後ろ向きの記憶力」と「自然な記憶力の前向きな運動」のせめぎ合いを経て実現する。しかし、このせめぎ合いはあくまでも「運動」が現実化するよりも以前の暗がりにあるものであり、われわれはこの暗がりを「運動」として顕在化した後、事後的に省みることしかできない。

3. 忘却の重み

ミンコフスキーは『生きられる時間』第一部の最終章を「過去」と題し、これについて分析する。ミンコフスキーは、「精神病理学」の領域のなかにベルクソンの「生活への注意」を引き入れることによって、ベルクソンが示した「生活への注意」が由来する暗がりを拡大しようとしたのではないだろうか。また、この暗がりを拡大することによってのみ、その重みそのものが持つ積極的側面を提示することが可能となるのではないだろうか。したがって、ここではまず、『生きられる時間』における「過去」論を確認したい。

ミンコフスキーは、まず、『生きられる時間』における「過去」の章において、まず、モーリス・ミニャールの著作『心的統一と精神障害』²⁰を引用しながら、「忘却」の否定的側面について論じようとする。ミンコフスキーは次のように述べる。

それは、「忘却されたものの塊 (masse de l'oublié)」である。われわれはこの塊が、その全ての重さ (poids) をもって、過去がそれによって未来において私たちの行動を描くところの、現在というこの鋭い切っ先の上に、その切れ味をより鋭利にするために、(同時に、また、しばしば、悲しいことに、これを押しつぶすために) のしかかるのを感じるのである……²¹。

このようにミンコフスキーは、「忘却されたものの塊」が、「未来において」これから顕在化しようとする「行動」に対し、これを、その「重さ」によって押しつぶそうとするのを見る。さらにミンコフスキーは、過去の性質について次のように述べる。

決るような鋭さをもって、新しい一つの要素が過去のなかに浸透する。過去は単に在っただけでなく、もはやないのだ。思い出の誕生。否定 (négation) が時間のなかに浸透する²²。

こうしてミンコフスキーは過去に対し、その「否定」としての性格を明確に付与する。「忘却されたものの塊」としての過去は、その「重み」によって、われわれにおける成されつつある「行動」の上のしかかるものであることが示されるのである。

しかし、この「忘却されたものの塊」の否定的側面について論じた後、ミンコフスキーは、これがわれわれの現在に対し「重み」としてのしかかるばかりでなく、積極的側面を持つもの、すなわち現在における特定の過去の喚起を裏から支えるものとしてこれを記述しようとする。ミンコフスキーは、次のように述べる。

記憶の積極的な発現は、常に「忘却されたものの塊」のなかに足を突っ込んでいる。(中略) どのような深さにおいて過去の断片が喚起されるのであれ、いつでもその周囲には、漠然として暗い一つの圏のようなものがあるのであって、それはこの圏のなかから浮かびあがるのであり、またこの圏はそれの支えとなるのである²³。

このように、ミンコフスキーは「忘却されたものの塊」のなかに、否定性と同時にその積極性を見出す。われわれの「過去の断片」は、「暗い圏」の中から浮かび上がるのであり、また、この「暗い圏」はそれを裏から支えている。さらにミンコフスキーは、次のように述べる。

それは影たちの、忘却の、そして沈黙の王国である。そこは暗闇なので、われわれはそこで迷う。(中略) 忘却は記憶の欠損ではない。それは一つの積極的な意味をもっている。というのも、回顧が啓示する過去の原則が、何よりもまず忘却の規則だからである。過去におけるすべては時間による磨耗を被る²⁴。

ここでミンコフスキーは、「忘却が記憶の欠損ではない」ことを明言する。すなわち、「忘却」は記憶が記憶であることを可能にするのであり、記憶において積極的な意味をもつ。過去が時間による「磨耗」を被ることは「忘却の規則」であり、逃れられないものであるが、記憶はこうして忘れられることによってしか記憶とならないのであり、「忘却」の暗さによってのみ記憶がそれとして顕在化することが可能となる。

こうして、ミンコフスキーは「行動」や「生活への注意」がやって来る以前の暗がりを、『生きられる時間』第一部の最後に配置する。ミンコフスキーがこのような論述を第一部の最後に配したのは、第二部において展開される精神病理学的考察と、

生き生きとしたものに捧げられた第一部を繋ぐためだったのではないだろうか。すなわち、『生きられる時間』の二部構成それ自体が、われわれの生における生き生きとしたものと、それを支えつつ現在から逃れ去るもの、すなわちベルクソンから受け継ぎ、精神病理学的研究のなかで展開させた肯定性を支える否定性的研究に向けられたものであることが示されるのである。

4. おわりに—「暗い空間」に向けて

『生きられる時間』の全体を通して最後にミンコフスキーは、その最終章を、「生きられる空間の精神病理学のために」と題し、「生きられる空間」について分析する。ここで議論の中心に位置づけられているのが、「明るい空間 (espace clair)」と「暗い空間 (espace noir)」についての分析である。ミンコフスキーによれば、われわれの「生きられる空間」は、「明るい空間」が「暗い空間」によって「縁取られる (encadré)」²⁵ことによって構成されている。すなわち、前者は後者のなかに「はめ込まれ (s'incruster)」²⁶ているのである。しかし、病的状態においては「暗い空間」と「明るい空間」とが「二つに分かれ (se dédoubler)」、「重ねられる (superposé)」²⁷とする。すなわち、この「暗い空間」は、われわれにとって必要不可欠なものであり、「明るい空間」の「明るさ」を縁取り、支えるものであるにも関わらず、これら二つの空間が乖離し重なる場合には、「恐ろしいもの」²⁸として機能するというのである。しかしミンコフスキーは、一方で「暗い空間」について次のように述べる。

この闇 (obscurité) は、単なる光の欠如ではなく、何か非常に積極的なものを持っている。闇は、そこにある対象の物質性 (matérialité des objets) の前ではいわば影が薄れる (s'effacer) ような明るい空間よりも、もっと物質的 (matériel) で、もっと「内容の詰まった (étouffé)」ものであるように思われる²⁹。

このように、ミンコフスキーは、「暗い空間」の否定性を論じながらも、あくまでその「豊かさ」を強調しようとする。そして、『生きられる時間』の三年後に出版される『コスモロジーへ向け—哲学的諸断片』(邦訳『精神のコスモロジーへ』)³⁰においては、この「暗い空間」の積極的側面そのものに焦点が当てられ、これについての記述が成されていくことになるだろう。

¹ Eugène Minkowski, *Le temps vécu : Études phénoménologiques et psychopathologiques*, Paris, PUF, 2005, p. 255. (以下、『生きられる時間』を引用する際にはTVと略記し、その後に当該ページ数を記す。)

² TV, 256.

³ Eugène Minkowski, « La notion de perte de contact vital avec la réalité et ses applications en psychopathologie », in *Au-delà du rationalisme morbide*, Paris, L'Harmattan, 1997, p. 68.

⁴ プロイラーは、『早発性痴呆または精神分裂病群』(1911)において、フロイトの「自体愛 (Autoerotismus)」やジャネの「現実機能の喪失」を参照しながら、統合失調症における主要な症状として「自閉」概念を提示した。(Bleuler, *Dementia præcox oder Gruppe der Schizophrenien*, München, Minerva, 1978, p. 52 参照。)

⁵ *Ibid.*, p. 305.

⁶ Eugène Minkowski, *La schizophrénie : Psychopathologie des schizoïdes et des schizophrènes*, Paris, Payot, 2002, p. 109.

⁷ ミンコフスキーは、「自閉」概念の例として提示される「夢想」や「暗闇」の積極的側面について、しばしば言及を行っている。ミンコフスキーにとって一種の「自閉」とは、われわれの生の最も生き生きとした側面を含むものである。

⁸ TV, 60.

⁹ TV, 60.

¹⁰ TV, 60.

¹¹ TV, 60.

¹² Henri Bergson, *Matière et mémoire*, Paris, PUF, 1968, p. 7. (以下、『物質と記憶』を引用する際には、MMと略記し、その後ろに当該ページ数を示す。)

¹³ MM, 7.

¹⁴ MM, 88.

¹⁵ MM, 88.

¹⁶ MM, 88.

¹⁷ MM, 103-104.

¹⁸ この点についての詳細は、石井敏夫氏の『ベルクソンの記憶力理論—『物質と記憶』における精神と物質の存在証明—』の第五章「純粹記憶力理論—記憶と身体—」を参照させていただいた。石井氏は、現在の「運動」による過去の「イメージ」の抑止と準備という一見逆説的な関係性について、次のように述べる。「ある運動が、ある特定のイメージの顕在化を準備できるのは、その運動が、その運動の効果によって潜在的にとどめられている当のイメージそれ自身によって背後から暗に監視されている場合である。(石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論—『物質と記憶』における精神と物質の存在証明—』松戸、理想社、141頁。)」このように、「運動」が「イメージによる再認」を抑止しながらもそれを準備できるのは、その「運動」が、自らの準備する「イメージ」によって暗に裏打ちされている場合である。この裏打ちする「イメージ」は、「運動」がこれから「顕在化するイメージ」を準備しているあいだは、あくまで「潜在的なイメージ」としてそこにとどまっているだろう。

¹⁹ MM, 107.

²⁰ Maurice Mignard, *Unité psychique et les troubles mentaux*, Paris, Alcan, 1928.

²¹ TV, 144.

²² TV, 157.

²³ TV, 145.

²⁴ TV, 152.

²⁵ TV, 397.

²⁶ TV, 397.

²⁷ TV, 389.

²⁸ ミンコフスキーは次のような患者の言葉を例として示している。「秋の景色が(彼はそれを目の前にしていた)、場所を変えないのに、もう一つ別の、非常に繊細で目に見えない、ほとんど確かめられないような空間に浸透されていました。この第二の空間は、暗く、あるいは空虚で、あるいは恐ろしいものでした。これらの表現のどれが一番真実に近いかを言うのは難しい。あるときはある空間が動くように思われ、また、あるときはそれらは互いに貫き合いました。それらは、交差し合い(s'entrecouper)ました。」(TV, 397.)

²⁹ TV, 393.

³⁰ Eugène Minkowski, *Vers une cosmologie : Fragments philosophique*, Paris, Payot, 1999.

L'obscurité de la mémoire :

Le Bergsonisme chez Minkowski

Ai SATO

Comment Eugène Minkowski hérite et élargit le Bergsonisme dans ses études phénoménologiques et psychopathologiques ? Dans son œuvre principale, *le temps vécu*, il souligne « l'attention à la vie » chez Bergson pour décrire le poids de l'oubli. En la considérant comme négation, Minkowski montre qu'il supporte l'affirmation. A travers cette union entre la négation et l'affirmation, le poids de l'oubli, en tant que négation, constitue notre mémoire et nos présentes actions. L'obscurité de la mémoire a donc un aspect positif en demeurant dans son ombre.